

「超群島——ライト・オブ・サイレンス」展

3.11が私たちに突きつけた問い

2011年3月11日以後、エネルギー問題やインフラストラクチャーの脆弱性、中央と地方の産業構造の格差や金融資本主義がもたらす非対称性、さらに危機管理体制と安全保障問題、政治の無力性などが次々に明るみになっております。つまり戦後の総括を先送りにしたツケが被災における被害を深刻化しているのです。「3.11」は、モダニズムに根差した戦後のパラダイムに切断線を引き、いくつもの自己矛盾を孕んだ問いを私たちに突きつけております。

国家的枠組みから離脱して、土地に根差した固有の文化が現代的文脈に蛸巣(群島化)し、そしてそれらがしばらくすると離散して再び異なった群島として組み替り、果てしなく反復する様態を「超群島」と呼ぶことにします。高度経済成長という社会背景のもとに交通インフラの整備などを通して実現されてきた、これまでの日本列島の将来像を現代の情報インフラの整備を介していかに書き換えていくのか、またコントロールを失い機能不全と化したこの国のシステムの問題解決を図るための新たな意思決定のイメージとは何なのかといった問いに対して、本展覧会では、新たなコミュニケーション間のプロトコルを起動させ、パブリックな意思決定のイメージに介入する「アーティスト/アーキテクト」たちのメッセージを発信するものです。

さらに青森が持つ深い森のイメージと土着性、そして縄文という古代の時間層に「ライト・オブ・サイレンス(静かなる光)」を照射し、「生と死の循環」と「リスク社会とアニミズム」の問題を提議いたします。本展に出品しているイギリス人アーティストのダレン・アーモンドが「3.11」以前の岩手県宮古市の三陸海岸浄土ヶ浜を満月の下(ライト・オブ・サイレンス)で長時間露光によって撮影した作品「Fullmoon @ Miyako」(2006年)は、「死と再生」を繰り返す永遠の循環を浮かび上がらせました。最後に本展覧会の企画者として、出品者でもある磯崎新氏の「群島」というコンセプトから多くのインスピレーションをいただいたこと、また、参加されたアーティストや建築家、そして彼らを支え協力された多くの方々に深く感謝の意を表させていただきます。最後に動線設計よって本展覧会のテーマとなった「超群島」の島々(各展覧会場)の架け橋を施された建築家青木淳氏に敬意を表します。

	青森県立美術館美術統括監／飯田高誉
---------------	-------------------

青森から見た現代日本の姿

2011年3月11日に発生した東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の後で、私たちは強固なはずの都市インフラが実はとても脆弱であること、順調なはずの国家の財政が危機であること、公平なはずの中央と地方の関係が実は不均衡であることなどを知りました。それは一夜にして状況が一変したということよりも、1960年代から徐々に構築してきた私たちの社会システム全体が耐用年数を迎えつつあることが顕わになったということだと思います。今から26年前の1986年、ドイツでエネルギー問題や原子力発電の是非がさかんに議論されていた頃、社会学者ウルリッヒ・ベックは、科学技術が生み出した危険を科学技術によってコントロールする私たちの社会のありようを「危険社会」と名づけ、警告しました。現在の日本社会はベックがいう「危険社会」そのものであり、大規模発電、工業地帯、超高層建築など、科学技術が生み出した新しい都市の基盤群はコントロール不可能な「新しい自然」として人々の不安の対象となっています。ここに現代的な霊(アニマ)の現れをみることもできるでしょう。

こうした視点で工藤哲巳や小島一郎など、1960年代に活躍したアーティストたちの作品をみると、不思議なほど現代的

に映ります。放射能や通信技術など、当時の新しい科学技術に彼らが感じた不安は、2010年代の今、現実のものとなったからです。すなわち、50年前のアーティストたちが今日の私たちに教えてくれることは、現在の日本社会が直面している困難な状況は戦後史全体を掛けて生じてきた問題であり、これらを理解するためには、これまでの50年で私たちの社会がなしてきた歴史全体を見直す必要があるということです。そこで本展覧会はまず、日本列島全体が高速道路や高速鉄道のネットワークによって結ばれ、ひとつの「群島 Archipelago」となった1960年代以後の日本の社会状況に加え、情報のネットワークによって世界中がひとつに結ばれた1990年代以後の新たな群島の状況を「超群島 Hyper Archipelago」と名付け、そのありようを描くアーティスト/アーキテクトに焦点を当てました。また今回は特に、青森が持つ深い森と大地のイメージにインスピレーションを得て、複雑な社会システムの上に生と死が隣り合う現代社会の「静謐な光(=ライト・オブ・サイレンス)」をもうひとつのテーマとしました。それは今回の展覧会にあたり、世代の異なる作家たちの作品群を今日の社会状況に照らしながら並べ、独特の抑揚のあるこの美術館の展示室にレイアウトして眺める作業のなかから見えてきたストーリーでもあります。展示のなかに現代社会に対する青森ならではの批評的なまなざしを感じて頂ければ幸いです。

	建築家・東洋大学講師／藤村龍至
---------------	-----------------

1——静謐な光

満月の夜に月明かりのみで撮影されたダレン・アーモンドの〈Fullmoon〉シリーズは、人間の気配が消えた夜の風景が、淡い月明かりと長時間露光によって昼の世界のごとく映し出されている。これらは2006年来日した際に宮古、美浜、高浜などで撮影されたもので、3.11以後、まったく別の意味を持つようになった。津波に飲まれた宮古、原子力発電所群のそばの美浜、高浜、小橋、難波江などの海岸の写真に映された、静謐な光に満ちた風景は、まるで震災以後の世界を予言し、人間の存在の無力さを批評しているかのようだ。

2——近代化と地方

津軽の厳しい自然とそこで強く生きる人々を撮影し続けた小島一郎の作品は、雲間から射す神々しい光に照らされた水田、雪原をひとり歩く農夫、馬車の轍など、敗戦してもなお、青森の白い大地と荒ぶ海を強く生きる人々の生活を美しく描いている。雪に埋もれる農具や水子のための化粧地藏など、一見、牧歌的な風景を切り取った美しい写真にも、日本が富国強兵政策のもとで地方都市に国家の食料庫としての役割を担わせるべく、本来、熱帯・亜熱帯気候原産の稲を寒冷な東北地方に導入しようとしたように、中央本位の国策の影で歪められた地方の姿がある。

キュルルfeat.チハルチロルの《ひかりのありか》は、都市の煌々とした夜景を映し出すモニターの前に、福島第一原子力発電所を模した立方体が4つ並んでいる。リボンが結ばれ、まるでプレゼントのようにみえるそれは、都市の電力が原子力発電所からの贈り物であることを示すと同時に、原子力発電所を通じてなされる地元への贈り物、すなわち地元自治体への交付金を始めとする、中央からの様々な経済的な還元が行われていたことを示す。その贈り物のリボンは、3.11まで解かれていなかった。3.11以後、パンドラの箱のように開け放たれた原子力発電所の廃墟の跡から、その贈り物の意味、すなわち近代化を果たした日本列島における中央と地方の政治的な関係が示されることとなった。これからしばらく私たちの社会は受け取ってしまった贈り物の意味を考え続けることになるだろう。

3——フクシマとヒロシマ

長期的な避難を余儀なくされた福島第一原子力発電所周辺の住民8万人のための都市を構想した藤村龍至の《雲の都市》は、毎年3月11日に8万人が一度に集まり、故郷に向けて黙祷を捧げることができる鎮魂のための広場「丑寅の森」を備える。ここでは、フクシマから鬼門/裏鬼門の方角へ取られた軸線を延長し、沖縄へ同様の都市を建設する構想へと拡大している。フクシマ(原発)、埼玉(郊外化)、沖縄(基地)など、戦後の日本が近代化の過程で生み出した様々な歪みを象徴化する軸線である。

呻くように立ち尽くすミイラのような人々やドクロの海で祈る聖母のような女性が描かれた阿部合成の《声なき人々の群れ》や《埋められた人々》は、言葉を残さぬままに亡くなった人々の鎮魂歌のようにみえる。これらの作品に、国家に対する無言の抗議と、敗戦後の彼のシベリア抑留体験を重ねてみることは難くない。ここでは、これらの作品を震災と原子力発電所の事故の犠牲となった無名の人々の怒りや悲しみ、救済への願いを表すものとして召還する。出雲、若狹、熊野、平城京、平安京、伊勢、富士、鹿島といった象徴的な場所が軸線によって関係付けられることを示した磯崎新の《しまじまの黄昏》は、フクシマを既存の構造に結びつけることで、神話の一部に取り込もうとする。原爆の被災地が、磯崎の師であり世界的な建築家である丹下健三が引いた原爆ドームと平和公園をつなぐ1本の線によって「平和都市・広島」として象徴化されたように、フクシマを象徴化しようとする。原爆の廃墟や核爆弾によるジェノサイドをモチーフとした今井俊満の(ヒロシマ)シリーズは、バーナーで焼け焦がしたキャンバスに絵の具の塊を激しく流動させ、核爆発による物質の溶融の瞬間やその後、降り注いだ黒い雨を描写している。それは「廃墟としての未来」を打ち出して来た磯崎の作品と重ね合わせることで、未来を強く予告する。

4——危険社会

3.11以後の放射能汚染や食品添加物などに代表される今日の「危険」は、化学や物理学の記号によってしか表示されず、ガイガーカウンターなどの特殊な機械がないと認識できない。つまり、現代社会においては、科学が「危険」として提示したものを国民が受け入れるか否かが問題になる。言い換えるなら、そこには、科学者が大衆に知識を提供し、その合理性を理解させ「啓蒙」するという構図が存在する。タール潰けになった鳥の彫刻や奇形化した鳥の写真からなるマーク・ダイオンの作品は、科学によって自然を支配し、社会の富を増加させることが、今日の汚染を誘発していることを提示する。ハンバーガーやフライドポテの化石は、近代化された社会における食の過剰な生産とその飽和の問題を提起する。そして同時に、体系的な知識や高度な測定機器によって生み出された、一見、客観的で普遍的にみえる科学の正しさが、絶対的なものではなく、相対的な正しさでしかないことをユーモラスに示そうとする。

5——アーキテクトの戦後史

1945年以後の日本の各時代における建築家のイメージを描いた mashcomix+TEAM ROUNDABOUT の《戦後建築史マンガ》は、戦後史を大阪万博の行われた1970年、阪神・淡路大震災、オウム事件、インターネット元年を迎えた1995年、東日本大震災の起こった2011年によって4つに区分する。建築と政治が緊張関係を保っていた頃(1945-70年)の未来を予測する科学者として描かれていた建築家は、国土全体の近代化と都市の拡大のプロセス(1970-1995)で、建築家は外部空間で団体戦を行う組織型の設計者と、内部空間で1対1への関係でセッションするアトリエ型の作家へと

引き裂かれる。その後のグローバル化と情報化のプロセス(1995-2011)は、まったく生きる女子高生とオタクたちの均質な世界をアメリカ発のシステムが見下ろす、メタシステム型の建築家像を浮かび上がらせた。そして、震災を経て、コミュニティに介入してボトムアップによってヴィジョンを描いていく「7人の侍」のような建築家像(2011)が浮かび上がりつつあるなかで、危険社会と現代のアニメ(霊)という今日的なテーマで社会を俯瞰する青森の視点が《戦後建築史マンガ》の集大成として描かれた。

6——ウェブに描かれた野生

画像検索のアルゴリズムを逆手にとってインターネット上にある画像を格子状に表示するチームラボの《グラフィティ @グーグル》は、画像を意図的に配列し、グーグルの検索結果をキャンバスにみたて1枚の絵を描いた作品である。彼らは、今日の公共空間をかたちづくるグーグルを使って絵を描くことを、公共空間を違法に占拠して匿名的に制作されるグラフィティになぞらえてみせる。

ここではさらに工藤甲人や野澤如洋、高橋竹年ら伝統的な日本画家の鴉図とチームラボの映像作品を並べることで、ウェブ画面のスクロール(scroll)を伝統的な日本画の巻物(scroll)にみたて、水墨画の早書きとコンピュータの操作感覚をつなげてみせる。神話において空から世界を俯瞰し人間を導く賢者の役割を与えられてきた鴉がウェブを舞う姿は、ウェブを通して世界をハックし、未来をリードするチームラボの群像ともいえるだろう。

7——自然

巨大な石を男性器にみたて、母なる大地に直立させるストーンサークルと呼ばれる古代の遺跡を撮影した森万里子の写真は、生殖の比喻であり、豊穡の祈りでもある。それらが円環を描くさまには、死を新たな生の始まりと捉え、死を生と連続するものと考えていたといわれる古代の死生観が表されている。森は、遺跡だけでなく、自らつくったストーンサークルをも撮影している。それは、古代の自然の大きいな循環の一部として生きる思想を現代に呼び出すものだといえる。1997年に作家が白神山地を8日間にわたり歩行し制作したリチャード・ロングの《白神山地歩行》シリーズは、「白神で自分の存在は地を這う小さな虫のようなはかないものだった」と語ったことで知られている。あらゆる人為の影響を免れた世界最大のブナの原生林の中に、きわめてひそやかに残された円環は、人間もまたも大きい自然の一部として生滅し、循環する存在であることを暗示する。偏光パール系の絵の具で描かれた大庭大介の《FOREST》は、光の角度によってその色彩が構造色のように変化する。近づいて細部を観ると抽象画のようにみえるのに対して、遠くから全体を眺めると、鬱蒼と繁る樹海のイメージが現れる。鑑賞者の観る位置や天候、照明にあわせて移ろう掴みどころのない無人の森のイメージは、計り知れない自然の実体を仄めかす。

この作品は、樹々そのものを描くのではなく、樹々の間に漂う気配や光を描き森を表現することで、近代的なリアリズムのように明暗法などで自然の変化を否定し支配するのではなく、他律的な自然や環境の移ろいそのものと共生することの隠喩となっている。

8——神話

人間や島や国家が、街や少女や樹木などに翻訳される石井七歩の作品では、例えば、島国の大地は少女に喩えられ、街を支える大地を、母なる大地という表現が示するような安定したのではなく、少女のように不安定で未成熟なものと捉える。《理想惑星》では、平行世界をテーマに、現在のありえ

たかもしれない世界の別の可能態を4つの惑星に翻訳する。これらの表現は、ありえない世界を想像することによって私たちの社会の基盤に潜む曖昧さや危うさを批評する。中村宏の《観光独裁》もまた巨大な少女の身体をまるでひとつの国家のように描いたものだ。本作は、新幹線が開通してまもない1965年の日本の状況を鋼鉄の少女に喩えていると解釈できる。荒川修作の《作品》は木製の棺桶に紫の布を敷き、そこに巨大なセメントの塊を納めた作品である。固いセメントの表面には、荒川が手で掴み、蹴り、体ごとぶつかった痕跡が刻印され、さまざまな異物がはめこまれている。棺に横たわる、その形容しがたい形の塊は、社会のうちに潜む不安感や、人間の死に対する根源的な恐れを具現化したもののようにもみえる。高山良策の超現実的な絵画もまた、人間の中にある論理的には語ることができない衝動を映し出している。これらは、非科学的なものを排斥した近代が隠蔽しようとした魔術的なものや理性の通じない不条理な世界観を表現することで、戦後日本の社会的な矛盾や危機、近代化されてもおお失われなかった呪術性を鋭く抉りだしている。

9——ファルス

水蒸気爆発した原子炉をジオラマで再現した伊藤隆介の《そんなことは無かった》は、CCDカメラでライブ上映するインスタレーションである。お菓子の箱の中に水蒸気爆発した原子炉がある光景は、3.11以後、日常生活に遍在することになった見えない放射能汚染の状況やその怖れを具体化している。直接はみえないものを恐怖するしかない3.11以後の状況は、まるで荒ぶる神への畏怖に重なる。原子炉の形が男性器のかたちをしていることを踏まえて読み替えるなら、本作は、3.11で溶融した原子炉とその虚実の入り交じった実体を描くことで、不能になったファルス、すなわち男性優位の社会構造の綻綻と、それに対する人々の怖れを示している。ピンクのキューブでできたスプツニ子!の《チンボーグ》は、機械のベニスである。それは単なるオブジェではなく、装着者の心拍数に応じて上下する。つまり、この作品では男女の性差を交換することが試みられている。着脱可能な機械の男性器は、現代の性転換技術の問題をユーモラスに提示すると同時に、男性中心主義的な思考を転倒させ、ファルスの意味を不能にする。これはチューリップや芋虫などのかたちをした醜いファルスを鳥かごや水槽に入れて培養する様を表現することで男性優位の社会構造の歪みを客観化し、批判しようとする工藤哲巳の作品群と対になるだろう。さらに縄文時代の土器の破片を床に点在させ、大地にたつ石をファルスとみたてていた古代のストーンサークルのように現代の作品を並べることで、古代と現代を繋げファルスの意味を転倒させ、新たな原理を探るものとして各作品を位置づける。

10——再生

チェルノブイリなどで土壌の除染効果が実証されている「菜の花」を用いて放射能汚染の問題を考える「菜の花プロジェクト」に触れたことから制作が開始されたスプツニ子!の《菜の花ヒール》は、靴デザイナー、串野真也氏とのコラボレーションによるもので、歩くどハイヒールの先端部分からナタネが地中に埋め込まれ、その足跡から「菜の花」を咲かせる仕組みになっている。福島県南相馬市の仮設住宅の交流サロンで被災者と意見交換やアイディアの相談を行い、滋賀県で開催された「菜の花学会」に参加するなど、ネットばかりではなくリアルな空間でもコミュニケーションを重ね、生み出されていく本作は、コミュニティに介入してボトムアップによってヴィジョンを描いていく今日的なアーキテクトのイメージにも重なり、不能になったファルスに代わる、新しい社会構造や創造の原理の種子を撒くものである。

HYPER ARCHIPELAGO Light of Silence 超群島 HYPER ARCHIPELAGO ライト・オブ・サイレンス Light of Silence

磯崎新 Arata Isozaki キュルル feat. チハルチロル cururu featuring chiharu-chiroru 大庭大介 Daisuke Ohba ダレン・アーモンド Darren Almond 阿部合成 Gosei Abe 中村宏 Hiroshi Nakamura 小島一郎 Ichiro Kojima 工藤甲人 Kojin Kudo 森万里子 Mariko Mori マーク・ダイオン Mark Dion 石井七歩 Naho Ishii リチャード・ロング Richard Long 高山良策 Ryosaku Takayama 伊藤隆介 Ryusuke Ito 棟方志功 Shiko Munakata 荒川修作 Shusaku Arakawa スプツニ子! SPUTNIKO! チームラボ TEAM LAB 工藤哲巳 Tetsumi Kudo 今井俊満 Toshimitsu Imai mashcomix + TEAM ROUNDABOUT mashcomix + TEAM ROUNDABOUT 藤村龍至 Ryuji Fujimura 動線設計・青木淳 Circulation Recommendations: Jun Aoki 〔関連企画〕トヨタヒシ(三内丸山遺跡) Related exhibition: Hitoshi Toyoda

キュレーション:飯田高誉／藤村龍至
アソシエイトキュレーション:高橋洋介
動線設計:青木淳
会場構成:藤村龍至建築設計事務所(藤村龍至・沼野井諭)
協力:青森県教育庁文化財保護課

 青 森 EARTH 2012

青森県立美術館 AOMORI MUSEUM OF ART

〒038-0021 青森市安田字近野 185
tel. 017-783-3000 | fax. 017-783-5244
www.aomori-museum.jp | bijutsukan@pref.aomori.lg.jp

地下 1 階
 1 静謐な光
 Darren Almond ダレン・アーモンド 1971年ランカシャー（イギリス）生まれ。1993年ウインチェスター美術学校卒業。2005年ターナー賞ノミネート。主な展覧会に「センセーション」(1997年 英国王立芸術院)、「ヴェネチアビエンナーレ」(2003年 イタリア)、「テート・トリエンナーレ」[オルター・モダン]](2009年 テート・ブリテン・ロンドン)など
 1 Fullmoon@Takahama 2008 180x180 cm C-print faced mounted onto acrylic 2 Fullmoon@Nabae Coast 2008 180x180 cm C-print faced mounted onto acrylic 3 Fullmoon@Uwase 2008 180x180 cm C-print faced mounted onto acrylic 4 Fullmoon@Obase 2008 121.2 x 121.2 cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 5 Fullmoon@Mihama 2008 121.2x121.2cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 6 Civil Dawn@Mt. Hiei.10 2008 1/5+2AP 121.2 x 121.2 cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 7 Civil Dawn@Mt. Hiei.9 2008 121.2 x121.2 cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 8 Fullmoon@Obase Bay 2008 121.2 x 121.2 cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 9 Fullmoon@Miyako 2006 121.2x121.2cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame

2 近代化と地方
 小島一郎 Ichiro Kojima 1924年 青森県生まれ(1964年没)。1944年に現役兵として徴兵

3 現代化と地方
 キュルル feat. チハルチロル cururu feat. Chiharuchiroru 2006年 結成のアートユニット。キュレーター、アーティスト、デザイナー等から構成される。キュルルは「個」としての人格を持たず、「個」としての主張も持たない、ゆえに個人名の存在しない、複数の人間がかかわるアートユニッ

 地下1階平面図
--

 地下2階へ下る EV
 地下2階平面図

 34 1 静謐な光
 Darren Almond ダレン・アーモンド 1971年ランカシャー（イギリス）生まれ。1993年ウインチェスター美術学校卒業。2005年ターナー賞ノミネート。主な展覧会に「センセーション」(1997年 英国王立芸術院)、「ヴェネチアビエンナーレ」(2003年 イタリア)、「テート・トリエンナーレ」[オルター・モダン]](2009年 テート・ブリテン・ロンドン)など
 1 Fullmoon@Takahama 2008 180x180 cm C-print faced mounted onto acrylic 2 Fullmoon@Nabae Coast 2008 180x180 cm C-print faced mounted onto acrylic 3 Fullmoon@Uwase 2008 180x180 cm C-print faced mounted onto acrylic 4 Fullmoon@Obase 2008 121.2 x 121.2 cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 5 Fullmoon@Mihama 2008 121.2x121.2cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 6 Civil Dawn@Mt. Hiei.10 2008 1/5+2AP 121.2 x 121.2 cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 7 Civil Dawn@Mt. Hiei.9 2008 121.2 x121.2 cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 8 Fullmoon@Obase Bay 2008 121.2 x 121.2 cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame 9 Fullmoon@Miyako 2006 121.2x121.2cm C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame

 10 題不詳(五所川原市十三付近) 1958年 24.2 x 16.5 cm ゼラチン・シルバー・プリント
 11 題不詳(壬北地方) 1958-62年 24.7 x 17.7cm ゼラチン・シルバー・プリント
 12 題不詳(津軽地方) 1960年 24.1 x 16.6 cm ゼラチン・シルバー・プリント
 13 題不詳(五所川原市十三付近) 1960年頃 24.4 x 15.9 cm ゼラチン・シルバー・プリント
 14 題不詳(津軽地方) 1957-58年 30.5 x 18.8 cm ゼラチン・シルバー・プリント
 15 段畑の雪模様 1959年 19.6 x 29.8 cm ゼラチン・シルバー・プリント
 16 題不詳(弘前市) 1960年 16.4 x 24.2cm ゼラチン・シルバー・プリント
 17 題不詳(つがる市木造) 1958-61年 24.7 x 16.8 cm ゼラチン・シルバー・プリント
 18 題不詳(弘前市桜庭―東目屋方画) 1958-61年 16.5 x 24.3 cm ゼラチン・シルバー・プリント

 キュルル feat. チハルチロル cururu feat. Chiharuchiroru 2006年 結成のアートユニット。キュレーター、アーティスト、デザイナー等から構成される。キュルルは「個」としての人格を持たず、「個」としての主張も持たない、ゆえに個人名の存在しない、複数の人間がかかわるアートユニッ

 ト. アート、文化、社会といった現代の諸相をどこまでも記号化して提示することで、賛美、肯定、批判など様々な評価と解釈が生じる作品を手がけている(ただし、いわゆる「現代美術」だけは批判可能としている)
--

 19 ひかりのありか 2011-2012年 サイズ可変 映像、木、アクリル等

3 フクシマとヒロシマ
 藤村龍至 Ryuji Fujimura 1976年 東京生まれ。2008年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学。2005年藤村龍至建築設計事務所主宰。2010年より東洋大学専任講師。2007年よりフリーペーパー「ROUND-ABOUT JOURNAL」企画・制作・発行。2010年よりウェブマガジン「ART and ARCHITECTURE REVIEW」企画・制作。主な建築作品に「BUILDING K」(2008)「東京郊外の家」(2009)「倉庫の家」(2011)「小屋の家」(2011)。主な編著書に「1995年以後」(2009)「ARCHITECT 2.0」(2011)「3.11後の建築と社会デザイン」(2011)。主なキュレーションに「超都市からの建築家たち」(2010)「CITY2.0」(2010)

 阿部合成 Gosei Abe 1910年 青森県生まれ(1972年没)。旧制青森中学で太宰治と同級生であり、以来友人になる。1934年京都絵画専門学校日本画科を卒業。1938年「見送る人々」が二科展に初入選するも、アルゼンチン駐在大使の糾弾によって反戦絵画の烙印を押される。1943年に招集を受け満州を転戦。敗戦後、シベリアで2年間抑留生活を送り1947年に帰国。1960年にメキシコ国立近代美術館で個展を開催
 21 声なき人々の群れ(A) 1966年 92.2 x 56.1 cm 合板・油彩
 22 声なき人々の群れ(B) 1966年 114.3 x 76.5 cm 合板・油彩
 23 埋められた人々(A) 1966年 113.2 x 69.7 cm 合板・油彩

 阿部合成 Gosei Abe 1910年 青森県生まれ(1972年没)。旧制青森中学で太宰治と同級生であり、以来友人になる。1934年京都絵画専門学校日本画科を卒業。1938年「見送る人々」が二科展に初入選するも、アルゼンチン駐在大使の糾弾によって反戦絵画の烙印を押される。1943年に招集を受け満州を転戦。敗戦後、シベリアで2年間抑留生活を送り1947年に帰国。1960年にメキシコ国立近代美術館で個展を開催
--

 キュルル feat. チハルチロル cururu feat. Chiharuchiroru 2006年 結成のアートユニット。キュレーター、アーティスト、デザイナー等から構成される。キュルルは「個」としての人格を持たず、「個」としての主張も持たない、ゆえに個人名の存在しない、複数の人間がかかわるアートユニッ

 Mark Dion マーク・ダイオン 1961年マサチューセッツ州(アメリカ)生まれ。1986年ハートフォード大学スクール・オブ・アート卒業。2003年、同大学名誉博士号。考古学や科学的な手法を転用した展示によって科学の「合理性」への疑問を提示するインスタレーションで知られ、ニューヨーク近代美術館やテートギャラリー(ロンドン)で展覧会が開催されるなど世界的に高い評価を得ている。主な受賞にラリー・オールドリッチ財団賞(2001年)など

 24 3 fake fossils 2003 hamburger: h.2.5 x w.18.5 x d.17 cm / sausage: h.4 x w.18.5 x d.19 cm / french fries: h.2 x w.19 x d.19 cm / hot dog: h.4.5 x w.19 x d.7cm Ceramic
--

 33 4 fake fossils 2003 hamburger: h.2.5 x w.18.5 x d.17 cm / sausage: h.4 x w.18.5 x d.19 cm / french fries: h.2 x w.19 x d.19 cm / hot dog: h.4.5 x w.19 x d.7cm Ceramic
 三内丸山遺跡出土土器と併

 せて展示
 34 1 Tray of Tar and White fragments 2003 h.6.3 x w.88 x d.29.1cm Mixed media (FRP、石膏、タール)
 35 タール漬けの鳥 2003 h.42 x w.82 x d.28 cm / h.26 x w.54 x d.18 cm / h.36 x w.44 x d.23 cm / h.56 x w.69 x d.28 cm FRP, tar
 47 父母愛恩之板面鏡 1948年 各 47.0 x 36.0 cm 紙・木版
 48 道祖土饅 濡々の棚 1950年 67.0 x 31.8 cm 紙・木版
 49 道祖土饅 馬頭の棚 1950年 67.0 x 31.5 cm 紙・木版
 50 柳緑花紅頰 1955年 各 46.5 x 46.7cm 紙・木版
 51 蜩螗の棚 1960年 135.5 x 255.0cm 紙・木版

地下 2 階
 6 ウェブに描かれた野生

 team Lab プログラマー・エンジニア、数学者、建築家、Webデザイナー、グラフィックデザイナー、CGアニメーター、絵師、編集者など、情報化社会のさまざまなものづくりのスペシャリストから構成されているウルトラテクノロジスト集団
--

 mashcomix+ TEAM ROUNABOUT 1999年 結成。漫画家、イラストレーター、デザイナーなどで構成される創作漫画集団。現在までに8冊の同名漫画雑誌を発行。また、一軒の家屋をすべて使った「HOUSE」展、池尻中学校での「RANSEL」展などの展示活動から、雑誌「TOKION」[建築雑誌]での連載「N.Y. TOKYO BAR」の内装アートワークなど、多岐にわたる活動中。協力:松島潤平
--

 5アーキテクトの戦後史
 mashcomix+ TEAM ROUNABOUT 1999年 結成。漫画家、イラストレーター、デザイナーなどで構成される創作漫画集団。現在までに8冊の同名漫画雑誌を発行。また、一軒の家屋をすべて使った「HOUSE」展、池尻中学校での「RANSEL」展などの展示活動から、雑誌「TOKION」[建築雑誌]での連載「N.Y. TOKYO BAR」の内装アートワークなど、多岐にわたる活動中。協力:松島潤平

 37 戦後建築史マンガ 1945-1970 2009年 110 x 210 cm マンガ、テキスト
 38 戦後建築史マンガ 1970-1995 2009年 110 x 210 cm マンガ、テキスト
 39 戦後建築史マンガ 1995-2010 2009年 110 x 210 cm マンガ、テキスト
 40 戦後建築史マンガ 2011- 2011年 110 x 210 cm マンガ、テキスト
 34 戦後建築史マンガ 2012 2012年 110 x 210cm マンガ、テキスト

 榎方志功 Shiko Munakata 1903年 青森県生まれ(1975年没)。1921年ゴッホの原色図版を見て感動し画家を志し、松木満史などと青光画社を結成する。その後、画家としての修行のために上京。1928年に帝展に初入選。同年、平塚運一と出会い版画の道に進む決心をする。柳宗悦、河井寛次郎らの知遇を得て精力的に制作する。ルガノ国際版画ビエンナーレ、サンパウロ・ビエンナーレなど国際展において評価され、1956年ヴェネチア・ビエンナーレにおいて国際版画大賞を受賞する。1970年文化勲章受章

 榎方志功 Shiko Munakata 1903年 青森県生まれ(1975年没)。1921年ゴッホの原色図版を見て感動し画家を志し、松木満史などと青光画社を結成する。その後、画家としての修行のために上京。1928年に帝展に初入選。同年、平塚運一と出会い版画の道に進む決心をする。柳宗悦、河井寛次郎らの知遇を得て精力的に制作する。ルガノ国際版画ビエンナーレ、サンパウロ・ビエンナーレなど国際展において評価され、1956年ヴェネチア・ビエンナーレにおいて国際版画大賞を受賞する。1970年文化勲章受章

 33 4 fake fossils 2003 hamburger: h.2.5 x w.18.5 x d.17 cm / sausage: h.4 x w.18.5 x d.19 cm / french fries: h.2 x w.19 x d.19 cm / hot dog: h.4.5 x w.19 x d.7cm Ceramic
--

 42 藍楕図 1971年 275 x 803cm 紙・着彩
 43 拈無多運行連々絵巻(複製) 印刷物
 44 御簾々々図 1960年 173.0 x 716.0cm 紙・着彩
 45 酸湯大岳湯揚図 1955年代 55.5 x 69.5cm 紙・着彩
 46 八甲田山壽加由仙境図 1957年頃 56.0 x 69.0 cm 紙・着彩

 59 Kudaka island Site Installation II (Site installation and photographed by artist) 2004 111.4 x 128 cm (image size) Piezzo Dye print
 60 Kudaka island Site Installation III (Site installation and photographed by artist) 2004 128 x111.4cm (image size) Piezzo Dye print
 61 Kudaka island Site Installation I (Site installation and photographed by artist) 2004 111.4 x 128 cm (image size) Piezzo Dye print
 62 Callanish 2005 101.6 x 127.0 cm (image size) Gelatin silver print
 63 Stone Circle, Komakino 2004 55.0 x 68.0 cm (image size) Piezzo Dye print
 64 Stone Circle, Nishizakiyama 2004 55.0 x 68.0 cm (image size) Piezzo Dye print
 65 Stone Circle, Oshuro 2004 55.0 x 68.0cm (image size) Piezzo Dye print

 Richard Long リチャード・ロング 1945年プリストル(イギリス)生まれ。1968年ロンドンのセント・マーティン美術学校卒業。自然の中を「歩行」しながら残した痕跡を、写真、地図、テキストなどで記録した作品で注目を集め、1976年にヴェネチア・ビエンナーレのイギリス館代表に選ばれる。1989年ターナー賞受賞。1990年フランス文化勲章シュバリ工受章。2009年高松宮殿下記念世界文化賞(彫刻部門)受賞。1960年代末を代表する芸術運動アースワークの中心的な作家のひとりとして知られ、現在も郷里のプリストルを拠点に活動を続けている

 石井七歩 Naho Ishii 1991年東京都生まれ。主なグループ展にHidariZingaro史上最多人場者数を達成した「エノテロリスム」(2011年、HidariZingaro、東京)、「堂島リバービエンナーレ2011「Ecosophia」」(2012年、堂島リバーフォーラム、大阪)など
 80 私は海を抱きしめていたい 2012年 210 x 297 mm ink on paper 8点セット
 81 理想島[森林] 2011年 297 x 420 mm pen on photograph
 82 理想島[河川] 2011年 297 x 420 mm pen on photograph
 83 理想島[海原] 2011年 297 x 420 mm pen on photograph
 84 理想島[大気] 2011年 297 x 420 mm pen on photograph
 85 理想島[岩石] 2011年 297 x 420 mm pen on photograph
 86 理想宮[境界のある国、海のむこう、壁] 2011年 210 x 297mm pen on paper
 87 理想宮[宗教のある国、平和、秩序、強制] 2011年 210 x 297 mm pen on paper
 88 理想宮[子供の夢を想像する、大人の国] 2011年 210 x 297 mm pen on paper

 72 FOREST#3 2009 180 x 220 cm acrylic on cotton
--

 8神話
 高山良策 Ryosaku Takayama 1917年 山梨県生まれ(1982年没)。1938年に招集、軍隊生活の中でスケッチを描く。1944年、東宝航空教育資料製作所に入社し、難波田龍起や山下菊二と知り合い、1946年に前衛美術会の結成に参加。以後、同展や「日本アンパンダン展」を中心に活躍した。1951年に東宝教育映画を退社後は、学研、東宝、大映、円谷プロ、電通などで舞台美術、特撮ミニチュア、アニメ人形の製作なども行った。ウルトラシリーズで、成田亨の怪獣のデザインを立体化した人物としても知られる
 73 照葉樹林 1981年 112.0 x 162.0 cm 油彩
 74 ほんとうに見たいなら・・・ 1976年 194.0 x 130.3 cm 油彩・キャンバス
 75 題不詳 1964年 131.5x91.5 cm 石膏・パネル
 76 題不詳 1970年 52.5 x 64.5 cm 油彩・キャンバス
 77 風夜 1963年 145.5x91 cm 石膏・パネル
 78 題不詳 </